

# 大学における良い授業って

## 何だろうか？

—学生の授業評価アンケートから  
授業デザインを考える—

岩瀬 峰代

島根大学教育・学生支援機構  
大学教育センター准教授

### はじめに

どんな授業が良い授業なのか、学習目標、評価方法、教授方法それぞれのどこにポイントを置き、どのようにデザインすればよいかを理解した上で実践することは、教員にとって重要である。

学生の「学び」は、教員の「教える」という一方的な教授方法では成り立たないということが言われてきており、学生が学びたいという意味と教員の学んでもらいたいという思いを結び付ける重要性は「新たな未来を築くための大

学教育の質的転換に向けて、生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（答申）中央教育審議会2012」においても示されている。

そこで、島根大学（以下、本学）では、全教科（集中講義を除く）で実施している授業評価アンケートの結果と授業環境や教授方法との関係を示しながら、授業デザインを考えるワークショップを実施したので報告する。

「授業デザインワークショップ」は2012年度より本学が主催し、山陰地区FD連絡協議会共催の事業として、当該機関に着任して1～2年となる教員および希望する教員を対象に実施してきている。このワークショップの目的は、授業を担当するに当たって必要となる基礎的な知識やスキルを学ぶことにある。

「授業を担当するに当たって必要となる基礎的な知識やスキル」については、学生の深い学びに結び付く最新の教授方法を理解しながら常にアップデートしたものを提供する必要がある。そこで、学生の深い学びに結び付く教授方法の意義を本学の教学データを使って分析し、その結果を基礎的な知識やスキルを提示することができれば、受講者にも納得して使ってもらえると考えた。

1 アクティブラーニングの実施状況調査

「主体的に考え、どんな状況にも対応できる人材」育成に、学生が主体的に問題を発見し、解を見いだしていくアクティブラーニング(以下、AL)等が注目されており、本学においても全学的にALの導入に取り組んでいる。2014年に山地弘起氏らが提案しているALのタイプ「知識の定着・確認志向(思考の活性化)」「表現志向(表現技能の充実)」「応用志向(知識・スキルの活用)」「知識の活用・創造志向(総合的活動)」の4つの区分に具体的な事例を加えた表「表1」を提示し、教員にシラバス作成時にチェックしてもらうことで、これら4つのタイプのうちどのようなALをどの程度実施しているのかを毎年度調査し、AL科目実施率のデータとしている(学務情報システムで管理)。

なお、本学では2つ以上を授業中に実施し、かつ各タイプに相応した方法の実施頻度をポイントに換算(授業回数数の50%超…3、授業回数数の15%～50%…2、授業回数数の5%～15%…1)して、合計4ポイント以上(最高は12ポイント)の科目をAL(科目)として定義している。

ALタイプ	方法
知識の定着・確認志向 (思考の活性化)	振り返りシート(ミニッツペーパー)
	授業外学習の促進(予習・宿題)
	実験(検証実験等)、調査(ウェブ検索、図書検索など)
	質疑応答(双方向性のある活動。コメント・シートなど)
表現志向 (表現技能の充実)	練習課題、ミニテスト・クリッカー(知識の確認や意見の収集をする)
	プレゼンテーション(学生による発表活動など)
	ディベート(異なる立場に分かれた議論演習など)
応用志向 (知識・スキルの活用)	ライティング(論理的な思考を育成する。文章課題の添削など)
	問題基盤型学習(Problem-Based Learning)(テーマ設定型議論など)
	専門演習(ゼミ、抄読会、輪読会、ジャーナルクラブなど)
	シミュレーション(予測、模擬実験、模擬訓練、ゲーム型ワークなど)
知識の活用・創造志向 (総合的活動)	ケースメソッド(問題解決能力等の向上を図るワークなど)
	プロジェクト型学習(Project-Based Learning)(卒業研究含む)
	フィールドワーク(現地での実態に即した調査・研究など)
	創作活動(詩、小説、作曲、ゲーム、ダンス創作など)

[表1]アクティブラーニングの4タイプ

## 2 授業評価アンケートで学びを検出

授業評価アンケートは、授業の状況や全体像の傾向を見ることを通して課題やその解決策を探ることが目的とされている。しかし、本学では導入された2004年度後期から2015年度前期まで「授業・教員への評価」の項目のみを用いてきた。そこで、質問項目の見直しを行い、2016年度からはティーチングからラーニングの評価にシフトさせた。学生自身の主体的な学び(1~3)や理解の側面(13、16)を追加し、「この授業におけるあなたの学習や感想として、あなたの考えを5段階で示してください。」として、授業評価アンケートを授業の振り返りの機会とした(「表2」の授業評価アンケートの質問項目)。そのため、この授業評価アンケートの結果は、当該科目における学生自身の主体的な学びや理解の側面についての自己評価を示すことになる。

次に、授業評価アンケートから得た各項目の学生の回答と、各教員のシラバス調査から得た各ALのタイプのデータを統合し、ALの教育効果を測定した。その結果が「表2」である。色の付いた項目は相関があることを示しているが、ALをより多く含む科目の方が、学生は主体的に取り組み

授業評価アンケートの質問項目		能動的授業	合計	知識の定着・確認志向	表現志向	応用志向	知識の活用・創造志向
主体性	1 授業に積極的に参加した		.289**	.086*	.221**	.160**	.274**
	2 授業内容が興味深く、さらに学ぼうと思った		.228**	0.03	.188**	.133**	.237**
	3 問題(レポート、テスト、作品等)をより良いものにしようと努力した		.262**	0.047	.256**	.121**	.245**
学修状況	4 授業は質問や意見などを発言しやすい雰囲気であった		.308**	0.082	.235**	.210**	.258**
	5 授業は体系的に構成されており、理解しやすかった		.138**	0.076	0.064	0.07	.146**
	6 スライドや板書、配布資料等は整理されており、理解しやすかった		.108**	0.073	0.015	0.06	.136**
	7 学生の理解度を確認しながら授業が行われた		.212**	.132**	.130**	.122**	.150**
シラバス	8 教員の熱意が感じられた		.196**	0.006	.152**	.135**	.215**
	9 シラバスにある科目の達成目標は明確であった		.186**	.085*	.106*	.096*	.194**
	10 シラバスにある成績評価の方法は明確であった		.157**	0.078	.090*	0.076	.161**
満足度	11 授業の受講にあたってシラバスの記述は参考になった		.165**	0.047	.109**	.093*	.179**
	12 総合的に判断して、この授業に満足した		.205**	0.056	.153**	.111**	.208**
理解度	13 授業内容について説明できる		.257**	0.05	.209**	.155**	.247**
	14 授業内容について他の科目の学習内容など、本授業以外との関連性を考えることができる		.241**	0.075	.192**	.131**	.218**
	15 授業で学習したことを本授業以外においても応用することができる		.286**	0.077	.238**	.158**	.257**
	16 この授業の理解度を的確に判断する自己評価能力が身に付いている		.265**	0.064	.202**	.162**	.253**

相関係数  $|r| = 0.2 \sim 0.4$  弱い相関あり 検定  $^* : p < 0.5, ^{**} : p < 0.1$

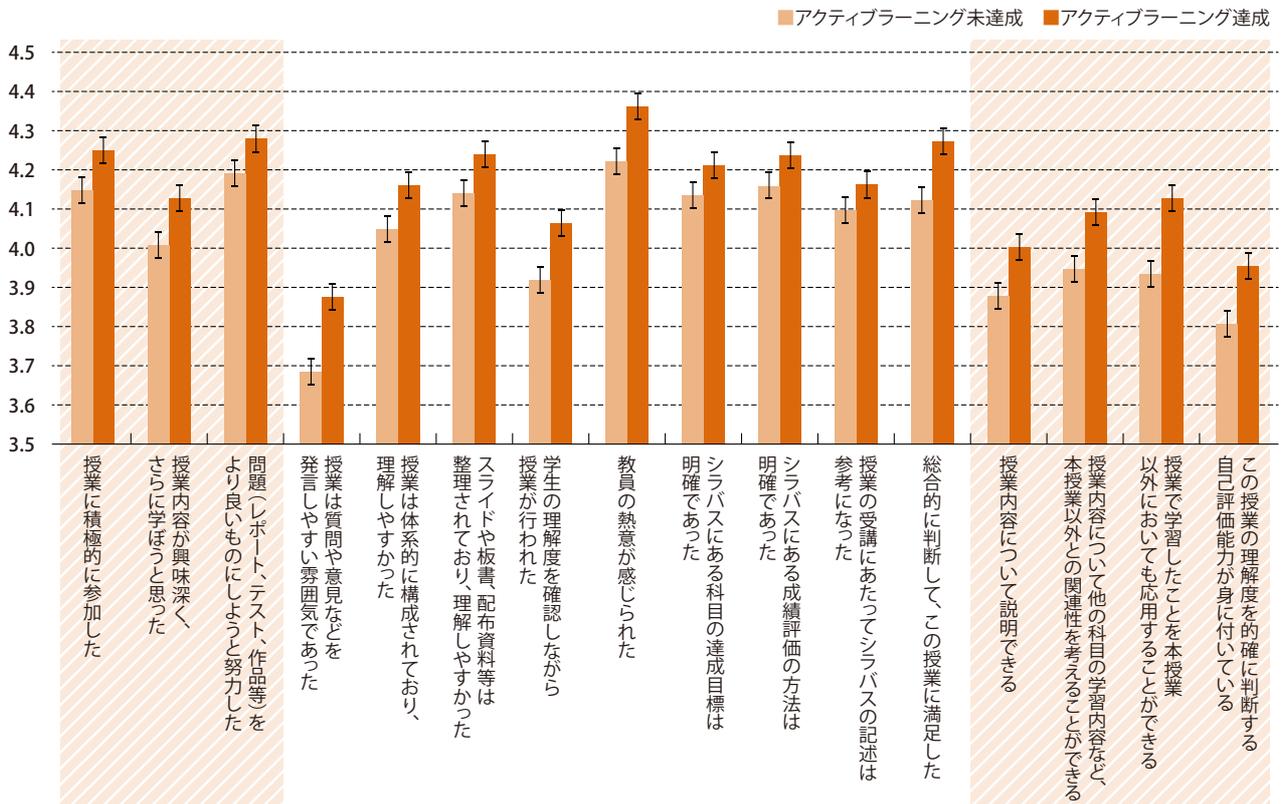
[表2] 個々の科目での授業評価アンケートの平均値とALタイプとの相関(2016年度調査)

た、理解できたと答えている。また、「表現志向」「知識の活用・創造志向」タイプのALをより多く導入している科目は、主体性と理解の評価が高く、「知識の定着・確認志向」タイプでは評価は低いと考えられる。

なお、ALの導入の割合が高いほど「質問や意見などを発言しやすい雰囲気」となっており、満足度も高くなっていることも示されている。

本学におけるAL(科目)としての定義「2つ以上を授業中に実施し、かつ各タイプに相応した方法の実施頻度合計4ポイント以上」を達成した授業科目(群)と、未達成の授業科目(群)の、授業評価アンケート項目の平均を示したものが「図1」となっている。

学生は、ALの導入割合が4ポイント以上の科目の方が、4ポイント未満の科目よりも、授業評価アンケートの全ての項目において高く評価していることが明らかとなった。なお、クラスの大きさと積極的に参加するかどうかや、クラスの大きさと満足度の相関関係も分析したが、関係がないという結果も得ている。



【図1】能動的授業定義の達成・未達成と授業評価アンケート項目の平均の差(2016年度調査)

### 3 教学IRに連動した授業デザイン

本ワークショップは、学生の深い学びに結び付く授業デザインを考えてもらうためにプログラムを編成した。

まず、アイスブレーキングにおいて受講者自身が過去に大学等で受けた授業の振り返りを行い、「良い授業」を考えるきっかけとした。次に、ワークIにおいて

前述した学生の主体的な学びや理解の促進に教授方法が関係していることを表すデータを示し、チームに分かれて「大学教育の学び」について考えるディスカッションを行った。このワークではさまざまな分野の教員と話し合う中で、良い授業とは何

開始時間	トピック	内容
10:00	オープニング	開会の挨拶、オリエンテーション
10:10	アイスブレーキング	
10:30	ワークI	「大学における良い授業って何だろう??」 学生の授業評価アンケートから授業デザインを考える
12:00	意見交換会	実践を語る(自分自身の実践を人に伝えてみよう!)
13:00	ワークII	「どうやって伝える?」授業で使うツールを検討する
15:00	休憩	
15:10	ワークIII	「チームでシラバスを作ってみよう!」シラバス作成 ワーク
16:30	クロージング	

〔表3〕授業デザインワークショッププログラム

かを深く考えるときにも、データに基づいて授業をデザインすることの重要性に気付いてもらうことを意図している。

ワークIIでは、学修目標を達成するための具体的な教授方法や、それに必要な評価方法についてもチームで話し合ってもらった。最後のワークIIIでは、どのような教授方法をいつ配置するかを検討しながら各自でシラバスを作成した。〔表3〕

このように、どのような教授法が「深い学び」に効果的かを理解し、一人一人が実際に行っている授業科目を題材として授業デザインを考えることによって、より実際に活用できるスキルを身に付けることができると考えられる。

### 4 授業改善と深い学びの好循環

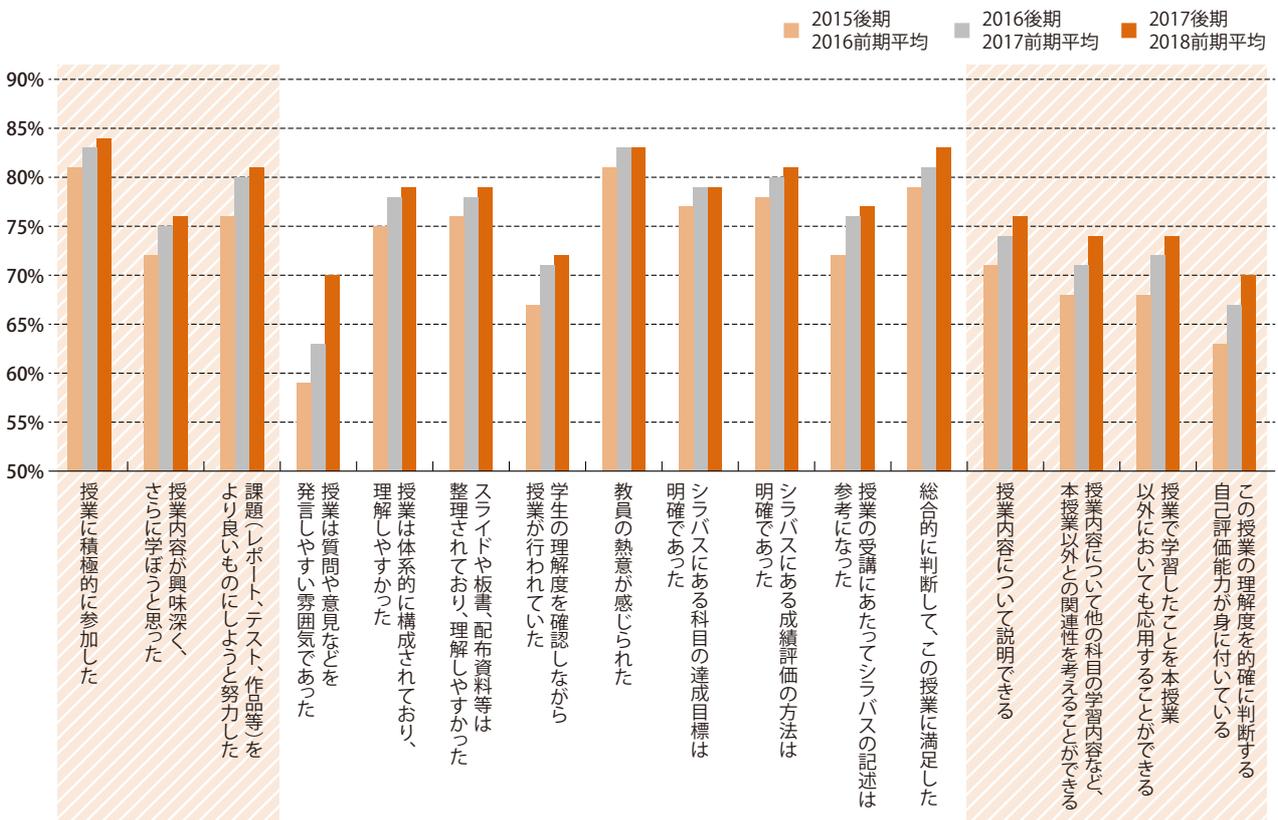
本学では、教授方法と授業評価アンケートの分析結果を、こうした授業デザインワークショップで提供するだけでなく、教学IRデータとして全学会議を通じて学部へとフィードバックしている。その結果、ALの導入度合いが4ポイントに達する科目の割合は、2015年度43%↓2016年度49%↓2017年度51%と年々増加してきた。また〔図2〕に示されるように、学生の授業評価アンケートの主体性と理解

に関わる項目についても、2015年度↓2016年度↓2017年度になるに従って、その数値は高くなってきている。以上のことから、学生の主体性と理解の自己評価がAL科目で高いことを学部にとりバックすることでALの実施率が高まり、その結果として学生の主体性と理解の自己評価がさらに高まっていくという、良好な循環が生み出されていると考えられる。

### 5 まとめと今後の展望

教学IR連動型FDの実施により、学生の主体的な学びや理解について教員と議論することが可能になり、教授法の改善が重要であることを示し、その改善状況も把握できるといった。

しかしながら、2020年度はコロナ禍により、対面の授業が困難な状況に置かれた。授業の多くはオンライン(同期型・非同期型)となり、教授方法は大幅に変更せざるを得ない状況となっている。今後はオンラインのためのALの方法の開発や情報共有が重要と考える。これまで以上に、教学IRを活用して「学び」が深まる授業の提案をしたいと考えている。



[図2] 授業評価アンケートの経時変化